

病 態 病 理 学

(旧・病理学第二講座)

近藤 洋一郎，岸本 充

病理学 第二講座

医学部百周年誌に記載された以降の教室の歩みを概観するが，はじめに教室の人事関係について述べる。1970年代後半から80年代にかけて大学院紛争の余波もあって基礎教室への入室者が減少し，人材確保に苦慮したが，第二病理では重松秀一助教授が信州大第一病理へ教授として転出したので，一時的にこの状況はさらに深刻であった。しかし幸いに第一病理より菅野勇，免疫より丹羽有一の両君が助手として加わり教室の運営に協力した。菅野助手はやがて帝京大市原病院臨床病理講師として転出し，後に教授に昇任した。丹羽助手の退室後，秋草文四郎君，窪沢仁君さらに第一内科研究生の近藤福雄君らが相次いで助手となって，人事面が一応安定した。秋草助手はやがて講師，助教授に昇任し，尾崎大介君が助手となった。近藤助手は社会保険船橋中央病院病理へ転出し，ついで帝京大学病理助教授へ転じ2010年1月，教授に昇任した。また大学院生として在籍した長尾俊孝君は帝京大市原病院病理講師をへて東京医大病理助教授，さらに2009年1月教授（人体病理学）に昇任した。

教育面についてみると，病理学講義の時間帯は解剖学について多かったが，講座，診療科等の新設が相次ぎ同時に医学の進歩に平行して教育内容の多様化，この講義枠は急速に狭められ，病材示説などの伝統的な時間も消滅した。特に各論を中心とした形態分類的な時間が減少し，少人数教育，実習重視の傾向から，学生CPC，学生の基礎教室派遣などが導入された。

研究の主要なものについてふれると，1970年代後半から80年代にかけて馬杉腎炎，血清病を実験モデルとしたアレルギー性臓器炎の超微形態面からの解析が継続して行われた。そして腎炎，血管炎におけるマクロファージの関与の態様や，腎炎の急速悪化，進行にかかわる因子の検討がなされた。また慢性腎炎における糸球体構造上の変化が血管鑄型などさまざまな角度から検討された。これに関連して，糸球体上皮細胞にも着目し，その障害，脱落が腎炎慢性化の一因となりうる可能性を示した。一方糸球体基底膜の新しい方法による超微形態，腎炎におけ

る荷電状態の変化なども解析された。これら腎炎に関する一連の研究は重松助教授，次いで秋草助教授，窪沢助手らによって行われた。

膠原病における臓器病変についてはこれまでも散発的に報告されてきたが，秋草助教授を中心に血管炎のみならずそれを基礎として発生する諸臓器病変の特徴についても研究が進められ，順次成果が報告された。

第一内科に奥田邦雄教授が着任されてから，肝細胞癌（肝癌）をはじめ肝疾患の剖検例が急増したが，これら剖検肝の検索中に多数の小結節性病巣が見出され，これを契機に当時不明であった早期肝癌の組織学的特徴や発生様式に関する研究が1990年代前半から開始された。そして早期肝癌の組織学的診断基準を設定，公表したが，この基準は多数の肝生検例にも応用され臨床診断の向上に大きく貢献した。これら一連の研究は近藤助手と，第一内科より派遣された大学院生を主力として行われた。

これと平行し第一外科と共同して胆道系腫瘍の研究も行われ，それらの組織学的特徴，多様性を明らかにし，診断基準の設定を試み報告した。

1990年代には臨床系大学院生の二年間受け入れが増加したが，消化器癌など各科の研究グループの主題に応じた臨床病理的研究がそれぞれに行われ，学位論文として発表された。

(こんどう よういちろう)

病態病理学

1997年に近藤洋一郎教授が退官されたのち，後任として1999年10月に北海道大学分子病理学教室から故石倉浩教授が赴任された。その後2000年に，秋草文四郎助教授は松戸市立病院病理部部长に異動された。窪沢仁講師は千葉市立青葉病院病理部部长に異動された。後任として，当時，大学院生であった永井雄一郎先生が助手に採用され，その後，2000年6月に岸本充助手が北海道大学分子病理学教室から赴任した。故石倉教授の指導のもと，尾崎大介助手，永井助手，岸本助手のスタッフで研究が開始された。

故石倉教授は医学部附属病院病理部部长を兼任されており，尾崎助手が附属病院へうつり講師となり

病理部副部長を担当した。後任として2000年8月に第一内科から研究にきていた加藤佳瑞紀先生が助手となり，主に病理部の診断業務を担当した。2001年，尾崎講師は千葉労災病院へ異動し，後任として2001年に佼成病院から二階堂孝先生が講師として赴任した。二階堂講師は2005年まで病理部副部長を務めた。もともと内科医であった加藤助手は2002年に船橋中央病院へ内科医として異動し，加藤助手のあとには永井助手が主に病理部で勤務することとなった。加藤助手の後任として2004年に北海道大学分子病理学教室から古屋充子助手が赴任し，活発に研究を開始した。二階堂講師退官後，故石倉教授から診断病理中谷行雄教授が病理部部長を担当することになった。現在は病態病理は診断病理と協力して病理部業務を行っている。

2006年5月，以前から不整脈の持病があった故石倉教授が急性心不全により急逝された。突然の出来事で当時教室は意気消沈した。後任教授は選出されず，腫瘍病理学，診断病理学，病態病理学の病理学3講座で2教授という変則的な状態となった。さらに2007年，永井助手は国立病院機構千葉医療センター診断医療研究室長として，2008年，古屋助手は横浜市立大学医学部分子病理学講座准教授としてそれぞれ異動した。その後，2008年に岸本講師が准教授となり，さらに2009年に清川貴子准教授が慈恵会医科大学から赴任し，病態病理学教室は准教授2人体制となった。

病態病理学教室では，基礎医学研究，臨床病理診断，医学教育の3つを柱として活動を行っている。基礎医学研究では，腫瘍の分化や転移機構，婦人科病理などをテーマとして研究を行っている。肝様腺癌は故石倉教授が第一報告者であり，故石倉教授のlife workであった。肝様腺癌は肝細胞への分化をしめす稀な腺癌であり，転移能が高く予後が悪い悪性腫瘍である。肝様腺癌において，肝の発生分化に関与する転写因子群（liver enriched nuclear factors）の発現，それらの肝細胞形質発現や転移能が影響，肝様腺癌の化学療法抵抗性などに注目し検討してきた。肝様腺癌以外でも，liver enriched nuclear

factorsは卵黄嚢腫瘍の α -fetoprotein産生，臍腫瘍の血行性転移，胃腺窩上皮の腸上皮化生などに関与することを報告した。腫瘍の肝様分化のほか，神経内分泌癌における神経分化関連転写因子，シグナル伝達因子などの解析を行い報告した。婦人科病理は故石倉教授の専門分野であり，産婦人科疾患の病理組織学的研究が行われてきた。永井助手は卵巣混合性上皮性腫瘍のなかから新たなvariantを見出し報告した。研究活動に加え，生殖機能病態学，生水真紀夫教授とともに千葉産婦人科腫瘍診断・治療・看護セミナーを立ち上げ，病理学の立場で千葉県の産婦人科医療の向上に努めてきた。2009年からは，産婦人科病理の研究は清川准教授を中心に行われている。

病態病理スタッフは病理部部長である中谷教授と協力して附属病院病理部の診断業務を行っている。清川准教授は赴任いらい精力的に活動し国内外を問わず婦人科病理学の発展に尽力している。病態病理学教室では，病理学は診断学として臨床医療の一翼であると位置付け，また基礎医学的研究においても臨床医療の視野を基盤とした研究を行うことを目指している。

医学部教育に関しては，腫瘍病理学，診断病理学，病態病理学の3講座で分担し，病理学総論，各論，実習および大学院の講義やスカラシッププログラムの指導を行っている。2009年には，岸本准教授が千葉大学ベストティーチャー賞を受賞するなど，教育活動にも力をいれている。2006年度から行われている日本病理学会学生発表プログラムに，熱意ある学生を募集し積極的に参加してきた。そして教室で研究した医学部学生3年生が2006年度に第1回目の最優秀賞を受賞することができた。さらに2008年度にも病態病理学，診断病理学の共同で指導した医学部4年生が再び最優秀賞を受賞することができた。惜しくも受賞はのがしたものの，これまでに総勢9名の学生が教室で研究し病理学会で報告してきた。このような学生のなかから将来の病理学を担う人材が育ってくれることを期待する。

（きしもと たかし）